

平成二十九年三月の收穫

土屋 博

一「名士の名文 金科玉條」守田有秋編

(日吉堂本店、大正四年刊、定價金參拾錢) 二七八頁、古書價格五百圓也。

廣瀨武夫中佐(一八六八生、一九〇四歿)をめぐる二つの名文、いと興味深し。

「艇長の遺書と中佐の詩」(夏目漱石)より。「露骨に云へば中佐の詩は拙惡と云はんより寧ろ陳套を極めたものである。吾々が十六七のとき文天祥の正氣の歌などにかぶれて、ひそかに慷慨家列傳に編入してもらひたい希望で作ったものと同程度の出來榮である」と。

また、「廣瀨中佐銅像除幕式式辭」(東郷平八郎)より。「廣瀨海軍中佐の銅像成り、今日を以て除幕式舉行せらる。思ふに是れ閉塞隊に對する江湖同情の致す所にして、生彩奕々たる此の銅像は長^{とくし}へに青年の意氣を表示し以て不言の教訓たる可きや必せり。平八郎席末に列して感慨禁ずる能はず聊か一言を述べて式辭と爲す。」と。

二「縮刷 新文章講話」五十嵐力著

(早稻田大學出版部、大正五年縮刷七版、正價金壹圓貳拾錢) 本文六三八頁、索引二八頁、古書價格百圓也。初版は明治四十二年。

たとへば、廣瀨中佐の書翰文「戦へり、勝てり、健在なり」の如き表現は斷敍文とせられ、シーザーの名高き斷舒文(「來たり、見たり、勝てり」)を模したる由。

三「雜誌日本及日本人 第六百七十一號」

(政教社、大正五年一月一日發行、定價金六十錢) 六三五頁、古書價格五百圓也。

「百人百字觀」なる特集、一人の有識者につき漢字一字をテーマとしたる自由作文を書く企畫なり。たとへば、眞は井上哲次郎、情は幸田露伴、怒は久保天髓、樂は高浜虛子、智は安倍能成、操は大町桂月、男は犬養毅、女は頭山滿、愚は長谷川如是閑の執筆といふ具合。たとへば、大町桂月、「操」なる字につきて曰く、「古來松柏の操と云ふ辭あり。何れの樹も夏の候には青々として居るが、寒さの節となると隨分落葉するのがある。松柏のみは如何程寒さが強くなり雪が降つても氷が張つても決して緑の色の變るやうな事はない。」と。

四「維新烈士史談 全」上田景二著

(共益社、大正十三年刊、特價金五圓四十錢) 古書價格千圓也。上下二卷、函入。

たとへば、勝海舟より西郷隆盛への言葉、「寡君既に大政を奉還す、江戸は皇國の首府にして、幕府の都市に非ず、然るに此の皇國の首府に據りて、百萬の生靈を苦しむるが如き、寡君の斷じて爲さざる所、從來幕府の爲せる所皆天下の爲に計りて、徳川の爲に謀れるに非ず、願はくば公平の心を以て、正大の處置を下されん事を」と。

五「賴山陽書翰集 上下」徳富・木崎・光吉共編

(民友社、昭和二年刊、定價金拾八圓) 八〇八頁十九九〇頁、古書價格三千六百圓也。

蘇峰の序文によらば、本書に掲録するは約一千通。凡そ世の中に山陽の手紙程多く世に保存せられたるものはあるまいと。また、彼は日本第一の文士賴山陽の書翰であると云ふ

ことを意識せずしては筆を執る能はずと。山陽の書簡の藝術品であるは、猶ほ山陽詩の藝術品であるが如しと。

上卷には、寛政九年（十八歳）より文政八年（四十六歳）までの三百四十一通を収録す。下卷には文政九年（四十七歳）より天保三年（五十三歳）まで及び別集（有栖川宮家、長州毛利家宛、熊谷鳩居堂宛など特定の宛先のもの、年不明のものなどを含む）合計六百四十三通を収録す。

六「舒景記事探勝討奇 千山萬水」小宮水心著

（立川文明堂、昭和五年第五版、定價金貳圓參拾錢）一四一〇頁、古書價格三百圓也。

自敘より、「祥雲棚引く元日の空より暮れゆく年華を惜しむ除夜に至るまで、有りと有らゆる題を假り、四時に應じての旅の記まで細大漏さず、最も遊記の例を示す事に重きを置きたり」と。

たとへば、「櫻花の賦」より、「あはれ櫻、單^{ひとへ}八重とりどりに咲き、其種類も數々あれど、何れも皆艶麗にして目を樂しましめ、曾て未だ外國^{とくに}に生ぜず。武神の権化、武士道の精華と尙ばれ、日本刀と共に我邦の誇りとする所なり。」と。

七「王道は東より」鹽谷溫著

（弘道館、昭和九年刊、定價金二圓五十錢）本文四六〇頁、附錄三九頁、古書價格二千五百圓也。

自序によらば、本稿は雜誌「斯文」に連載せし「海外通信」にして、「亞細亞の卷は照國丸の船室に成り、歐羅巴の前卷は伯林・來府の客舎に於てし、その後卷はベレンガリヤ號、而して亞米利加の卷は、太平洋丸の船室にて書き上げしものに係る」由。

埃及^{エヂプト}にて詠める歌、「三角陵は荒れて歲月悠^{はるか}なり 怪神像は古りて沙丘に没す 帝魂返らず繁華盡く 唯大江の舊に依つて流るる有り」と。

八「漢詩和詠集」姊崎正治著

（明治書院、昭和十五年刊、定價金貳圓）五五二頁、古書價格百圓也。

序言より、「平仄にも暗うして漢詩を誦し、てには（手爾葉）にも通ぜずして敢て和歌を詠じ、且つ漢詩を和詠す、他人より見れば痴か狂か、只年々世界周遊の旅に、諸の詩集を携へて古人の詩魂に接するを樂しみとし、興に乗じては之が和詠を試む、是れ只旅情を慰めんが爲のみ」と。王陽明和詠百首、蘇東坡和詠二百首など。

中に淡窗和詠百首あり。たとへば、彦山「たそがれに人なき堂にたつ香の けむりのすゑや山やまの雲」。

九「山鹿素行論語」松波節齋著

（教材社、昭和十六年四十一版、定價金五拾錢）九三頁、古書價格三百圓也。

序によれば、素行先生の日本精神史上に於ける偉大さは『中朝事實』にあり、儒教革新運動の先驅者として所謂古學派の祖なることは『聖教要録』にあり、大石内蔵助良雄をして敢然起たしめ、乃木大將、東郷元帥、吉田松陰をして感奮、盡忠報國の誠を致さしめたるは『士道』『武教小學』にあり、と。